

小麦、アフガンに「帰郷」



収穫された小麦を関係者に説明するアフマド・シヤ
ーさん(右) 11月8日、カプール、中野沙撮影

半世紀前、日本の研究者が持ち帰る

日本の研究者がアフガニスタンから半世紀前に持ち帰った小麦がアフガンの大地に「帰郷」し、このほど初めて収穫された。日本の支援事業の一環だ。戦争や内戦でアフガンの土地は荒廃しているが、日本の農業技術がアフガン再生に貢献している。

この小麦のルーツとなる種子は、横浜市立大の木原生物学研究所を設立した遺伝学者の故木原均博士が、小麦の起源を調査するため、1955年にアフガンから持ち帰った。研究所はその後も小麦を育て、種子を採取して保存してきた。

アフガン人にとって、小麦は主食のナンの原料となる最も重要な作物。だが、79年のソ連侵攻や2001年の米英軍による空爆、さらに長年続く内戦の影響で農地は荒れ果て、農業施設も反政府武装勢力タリバーンによって壊されてきた。

収穫された小麦は、同研究所で保存されてきた「子孫」で、昨年11月、首都カプールの試験場に植

黄金色の大地 復活への希望

えられた。

現地の研究所員のアフマド・シヤーさん(37)は、収穫された黄金色の小麦を手を「小麦がアフガンに戻ってきたことはうれしい。日本にいるいるなことを学んで母国に持ち帰りたい」と話した。今秋から横浜市立大に留学するという。

一方、国際協力機構(JICA)などによる小麦の品種改良事業も始まっている。アフガンの安定した食糧自給のため、乾燥して寒暖の差が激しい現地の気候や土地に適した在来種と、収穫量が多くて病気にも強い近代種を掛け合わせ、優れた品種を作り出そうという取り組みだ。

事業を統括する木原生物学研究所の坂智広教授(植物遺伝育種学)は「この半世紀に日本の科学技術で調べた情報を加えれば、現地に適した品種をいち早く作り出せる」と意義を説明する。

事業は次世代を担う農業リーダーの育成もめざしており、同研究所は昨年からアフガン人の研究生を受け入れている。坂教授は「成果が出るには10年以上かかるかもしれないが、人材育成と併せてアフガンの未来に貢献できたら」と意気込む。(カプール 中野沙)